

## 2025年 営巣状況

2025年の十三崖は、チョウゲンボウの営巣はありませんでした。これで、2020年から6年連続で営巣が確認されていません。ハヤブサは今年も繁殖し、ヒナを巣立たせました。十三崖でのチョウゲンボウの減少要因の一つは、ハヤブサの存在と考えられます。しかしチョウゲンボウは、2025年に十三崖周辺に少なくとも2個体は飛来しています。チョウゲンボウは、ハヤブサを完全に避けるという訳ではないようです。また十三崖における営巣数の減少のさらに大きな要因としては、データ解析結果からハタネズミの生息密度の減少が考えられます。

十三崖と同様なチョウゲンボウの営巣数の変動がポーランドで報告されています。ポーランドの中央部では、以前の十三崖と同様に多くのチョウゲンボウが営巣しています。営巣場所は日本と異なり、主にハシボソガラスの古巣を利用します。営巣密度は、2020年には100平方キロあたり35から36つがいであり、これは2000年代初頭の長野県中野市から小布施町にかけての営巣密度に近い値です。またポーランドには以前の十三崖と同様なコロニー的な営巣形態もあり、営巣数は地域や年によって最小5から最大31つがいまで変動し、巣間距離は25mの場合もありました。これらの値も、日本の集団営巣に近い値です。そしてこの営巣数の変動要因は、ネズミ類の密度の増減だと考察されています。

もちろんポーランドにもハヤブサは分布しています。他にもチョウゲンボウを捕食する猛禽類はいるでしょう。しかし、このポーランドの報告からもチョウゲンボウの営巣数の変動の大きな要因はネズミ類の密度の増減と考えられます。十三崖崖下の夜間瀬川河川敷には木本類や草本類が繁茂し、その周辺にはブドウの果樹園が広がります。ハタネズミを捕獲できる環境は減少しています。十三崖にチョウゲンボウの営巣数を回復させるには、周辺に採餌場として利用できる環境を拡大させることが必要だと考えられます。



木本類や草本類が繁茂した夜間瀬川河川敷